

9/13 アジェンダ・プロジェクト京都 講演会 新開純也さんのお話を聞く会



アジェンダ・プロジェクト京都では、9月13日(火)に、反戦・反貧困・反差別共同行動 in 京都や、市民連合、ミュニシパリズム京都の運動など、様々な活動をされている新開純也さんのお話を聞く会を行います。とりわけ1950年代後半から60年代を中心に、学生運動・社会運動について、そしてこれからの活動に必要なものは何なのか、などについてお話しいたします。じっくりお話を伺いたいと思います。ぜひご参加ください。

※コロナ感染状況への対応が必要な場合がありますので、事前申込をお願いします。

◆ 新開純也(しんかい じゅんや)さん プロフィール

- 1941年 満州奉天(現瀋陽)で生まれる。終戦後、兄(2歳上)、妹(3歳下)とともに母に連れられて(父は教師、軍役にとられシベリヤ抑留)父の郷里熊本県鹿本郡稲田村(現山鹿市)へ引き揚げ。
- 1959年 県立鹿本高校卒、京大文学部入学、文学部国史学科中退
- 1960年 安保闘争に参加、吉田分校(1回生-宇治分校、2回生-吉田分校)自治会委員長
共産主義者同盟(第一次ブント)に参加
- 1961年 同学会委員長
関西ブント創立に参加 第二次ブントに参加
- 1971年 共産主義者同盟全国委員会(「烽火」派-現統一委員会の前身)創設
- 1976年 (株)タカラブネに就職 1992年社長に就任(10年間)
- 2006年 「反戦・反貧困・反差別共同行動」創設に参加
- 現在 「反戦共同」世話人、NPO法人「きずな」理事長、「ミュニシパリズム京都」共同代表、
「情況」社取締役 等

●日時：2022年9月13日(火)
18時15分開場 18時半～20時半ごろまで

●場所：ひと・まち交流館 京都 第5会議室(3F)

アクセス：<http://www.hitomachi-kyoto.jp/access.html>

●参加費：一般600円 / アジェンダ各種会員・学生・生活困窮者は無料

◎要申込：ご参加は事前申込をお願いします。

右のQRコード、もしくは下記の申込フォームからお申し込みください。

<https://forms.gle/qMraeRdHjrk6ne7g9>



メールでもお申込みできます。アジェンダのメールアドレス(agenda@tc4.so-net.ne.jp)宛に

- 1)お名前
- 2)所属(任意)
- 3)メールアドレス(お書き間違いの無いようお願いします)
- 4)一般・アジェンダ各種会員・学生・生活困窮者 のいずれかを選択して記載

主催 アジェンダ・プロジェクト京都 <https://agenda-project.com/>

〒601-8022 京都市南区東九条北松ノ木町37-7 Tel&Fax 075-822-5035

＜プロフィール＞

1941年 満州奉天（現瀋陽）で生まれる。満州で教師をしていた父は軍役にとられ、シベリヤに抑留された。終戦後四歳の時、2歳上の兄、3歳下の妹と共に母に連れられ、父の郷里である熊本県鹿本郡稲田村（現山鹿市）に引き上げた。

1959年 県立鹿本高校卒業、京大文学部入学。文学部国史学科中退。

1960年安保闘争に参加。吉田分校自治会委員長（当時は1回生は宇治分校、二回生は吉田分校）。共産主義者同盟（第一次ブント）に参加。

1961年京大同学会委員長。関西ブント創立に参加。

第二次ブントに参加。

共産主義者同盟全国委員会（「烽火」派一現統一委員会の前身）創設。

1976年（株）タカラブネに入社、1992年から2002年まで社長。

2006年「反戦・反貧困・反差別共同行動」創設に参加。

反原発運動に参加、おおい現地闘争等で活躍。

【現在】「反戦共同」世話人、NPO法人「きずな」理事長、「ミュニシパリズム京都」共同代表、
「情況」社取締役 等

1) 生い立ちから京大に入るまで（0～18歳 1941年～1959年）

①

故郷は、熊本の阿蘇と有明海の間に広がる菊池平野、鹿本郡稲田村（現山鹿市）である。阿蘇の山並みを遠くに、川が流れ、田んぼが広がるのどかな田舎である。

生家は代々地主階級であった。母は田原坂で有名な田原村（現在熊本市）の地主の娘だった。父方、母方共に祖父はいずれも村長を務めた。

父の従兄弟とその親戚には、満州で総務局長をし、戦後ソビエトに長く抑留されて帰国後、熊本市長になった星子敏男や、その妻で甘粕事件で有名な甘粕正彦の妹たまこ、血盟団に参加した星子毅などがある。

（注）甘粕事件：関東大震災後の1923年、アナキストの大杉栄と内縁の伊藤野枝、大杉の甥が憲兵隊特高に連行され、憲兵大尉だった甘粕正彦らによって殺され井戸に遺棄された事件。甘粕正彦は後に満映社理事長、満州の夜の帝王と言われたが敗戦で自死した。

子供の頃、親戚が集まると戦前の話や、甘粕正彦の話などをよく耳にした。僕は小さいながら大人たちの話を興味深く聞いていた。

甘粕正彦の妹たまこさんに会った時、僕が学生運動をしていることを知っていて、「純也さんは兄の事をひどい人だと思っているでしょうが・・・」と話してきた。甘粕は自分から手を下したわけではなく、上に命令をした人がいたのだということを言いたかったようだ。

田舎の地主階級は同時に知識階級でもあり、支配者層の供給源であった。一部は農村の生活困窮や疲弊などから社会の諸矛盾を感じ、左翼＝マルクス主義者に、そして一部は下からの国家改造を目指す右翼としての急進主義者となっていたが、僕も戦前であればどちらかの急進主義者になっていたのではないかと思える。

②

中学生の時、アインシュタインの伝記を読んで自然科学に目覚めた。特に数学に興味があった。高校入学前の春休みに、従兄の高校教科書を借りて微積分などを読み、高校の数学を独学でマスターした。高校に入ると、退屈な授業よりも図書館で大学レベルの本を借りて読むのが楽しかった。フェルマーの

定理に魅了され、カントールの集合論一対一対応の考えに感心し、5次以上の方程式は代数的には一般解をもたないなどが興味深かった。

好きな数学ではあったが、その道に進むには才能がないことを早くも痛感してしまった。ガウス、アーベル、ガロワといった数学史上の大天才に比べるなど元より意味のないことであるのに、それもまた若さ故と言えるのだろう。（「近世数学史談」高木貞治、岩波は今も愛読書である）。

歴史にも興味があった。特に「世界史」が好きだった。高校二年の時だっただろうか、図書館で、多分ソビエト科学アカデミーから出たものだったか、「史的唯物論」の本を読んだ。「歴史にこんな見方があるのか」といたく感動した。

この頃はまだマルクスについては「共産党宣言」も読んでいなかったが、社会主義の解説本などを読み、漠然と「革命」というものがあるのだと知った。高校卒業時の寄せ書きに「革命」と書いた。しかし熊本の田舎で労働者を見かけることはなく、全くリアリティはなかった。

このような下地の中で進路選択を迷った末に、直前になって理学部志望から文学部に方向転換をした。当然僕が理学部を選ぶと思っていた数学教師は、酷く残念がった。

受験勉強はそれなりにした。もちろん当時塾などというものは存在しない。熊本県内ナンバーワンスクールは県立熊本高校であり、僕の通う鹿本高校は数年おきに、東大、京大、九大合格者がポツポツと出るとい程度だった。

高校時代には手当たり次第に文学書を読んだ。おもにヨーロッパの翻訳もので、トルストイ、ドストエフスキー、ツルゲーネフなどのロシア文学、スタンダールの「赤と黒」、ヘッセの「車輪の下」などがあつた。漱石も好きだった。「三四郎」は田舎者の三四郎が東京に出て都会に触れるさまを田舎育ちの自分に重ね合わせた。高校3年の夏休みに、大著「チボー一家の人々」で第一次大戦前の反戦運動、ジャン・ジョレスの暗殺シーンなど感動しながら読んだことを覚えている。

その頃の高校生には、まだ旧制高等学校の教養主義的雰囲気は少しは残っていた。百科全書的に何にでも興味を持ち、狭い熊本の田舎を出て広い世界へ飛翔したかった。高校生の僕の頭の中はすでに世界へと脱出しつつあつた。

③

僕の生まれた1941年は太平洋戦争開始の年であり、45年の敗戦から50年の朝鮮戦争、51年のサンフランシスコ講和条約、そして52年の独立と日米安保条約締結が行われ、55年には、「もはや戦後ではない」と言われて高度成長が始まった。

55年は、左右社会党の統一と保守合同による「55年体制」が開始された年でもあつた。50年安保闘争では、いわゆる全面講和か片面講和かが米ソ対立を背景に争われた。その過程で、共産党の所感派（）と国際派（）の分裂があり、山村工作隊などの火炎瓶を使った軍事闘争が展開された。しかし、僕の田舎にまではこうした動きはほとんど伝わってこなかった。進駐軍（米軍）がたまに通ると、物珍しいものを見るように皆が道路に出て手を振ったりする光景を記憶している。また道路の辻に新聞アカハタが掲示され、熊本市内に出て行ったさる青年の仕業だと噂されたが長くは続かなかった。

1955年には共産党の第6回全国協議会＝六全協が行われ、日本共産党がそれまで中国革命に影響を受けて、農村から武装闘争で都市部を包囲するという革命路線を放棄する決議を行った。

この路線変更の説明や責任の所在があいまいであることから学生黨員などが指導部のやり方に不信・不満を持ち、多くの学生黨員らが共産党をやめた。この六全協問題は後の共産主義者同盟の結成に繋がりと、新左翼誕生へと関連していく。

翌56年にはソ連共産党の20回大会での平和共存路線へと転換し、フルシチョフによるスターリン批判の秘密報告があつた。それまで絶対化されていたスターリンが批判されたことは日本だけでなく世界を驚かせた。

これらの左翼学生への影響や敗北感のさまは小説「されどわれらが日々」（柴田翔）等に描かれている。

57年には岸信介が首相になり、教師への勤務評定が始まり、58年には警職法改悪などの反動的攻

撃が強化されていく(いわゆる「逆コース」)。これに対して勤評闘争が行われ、教組と共に、復活した全学連が大きな役割を果たした。

全学連は、「歌や踊り・・・」と揶揄された共産党の六全協後の路線に対して、「層としての学生運動」や「先駆性理論」を掲げて平和と民主主義の政治闘争を重視する方針を掲げた。

警職法反対闘争では法案を廃案にした。1954年にアメリカがビキニ環礁で行った水爆実験で漁船乗組員が被ばくをした「第五福竜丸事件」をきっかけに、原水爆禁止運動が盛り上がった。55年には原水協が結成されたが、その後61年にソ連の核実験をめぐる社会党と共産党の考え方に違いが生まれ、原水禁と原水協に分裂をした(63年)。

またこの時期に各地で米軍基地反対闘争が展開された。特に砂川闘争は有名である。現地住民、社共、労働組合(東京地評)、全学連などが共闘会議を結成し、しばしば測量を強行しようとする警察と流血の闘争が展開された。この時の全学連の伝説的指導者が森田実(現評論家)で、警察と対峙しながら「赤とんぼ」の歌が歌われた。

これらの一連の闘争を通して共産党本部と全学連(その指導部は共産党学生細胞)との対立が深まり、58年12月の共産主義者同盟の結成へとつながる。今では信じられないだろうが、旧帝国大や有力私立大を中心に、学内には共産党学生細胞があり大きな影響力を持っていた。

これらの動きは田舎にはほとんど伝わらず、わずかに勤務評定に対して教師の職場会議が行われていたのをかすかに記憶している。体育祭での仮装行列で鉢巻をしたデモ隊を僕の演出で登場させたりしたが、直接学校や地域で運動を見たわけではなかった。

戦後の復興は、何よりも食糧事情の改善を通して感じられた。サツマイモや麦飯が米飯になったのは高校の時だった。小学校の給食はあの懐かしくもマズイ脱脂粉乳やコッペパンだった。

注)このころの共産党の動向については『日本共産党』中公新書、中北一最近出版され手軽に手に入るのがこの本だが、いい本とは言えない。

2) 入学と60年安保闘争

①

京大にはどういうわけか優秀な成績で入学したらしい。大学というところは官庁と同様の権威主義があり、何番で入学したかを教授たちは意外と重視する。僕がのちに同学会委員長になり、当時珍しかった停学処分を食ったりしたとき、国史学科の主任教授が、「新開には学問をやらせたい・・・」といって助手を通して強力な説得工作があった。しかし僕は国史学科に進んでから一度も授業に出なかった。もう学問の道を進もうという考えはなく、「職業革命家」の道を漠然と思っていた。

当時の京大は、僕の次の年次まで1回生は宇治分校、2回生が吉田分校で、自治会もそれぞれにあった。2年後に宇治分校がなくなり、1、2回生合わせた教養部自治会に一本化された。教養部を終えて3回生に上がる時に専攻を選ぶことになっていた。

入学と同時に、一浪して経済学部と同時に入学をした兄とともに宇治市に下宿をした。今のような学生マンションのようなものはなく、文字通り一般民家の二階にある一室を借りるのである。

1回生の一学期だけは真面目に授業に出た。内容はほとんど覚えていないが、退屈な講義が多かった。かすかに思い出すのは、数学ではポワンカレが考案した非ユークリッド幾何学の説明、西洋史ではH・Gウェルズの原書、哲学では後にハイデッガーの研究者として有名になった辻村さんが「プロダクツイオン、ポアステレン・・・」云々と話し、今にして思えば、西洋思想の特徴としての「対象化」あるいは「生産、労働」の概念を説明していたのだろうと思う。

たまに京都市内や奈良の名所に出かけたりもした。

食事はすべて生協の学食だった。素うどんが15円、カレーライスが30円、定食は50円ほどだった。田舎で外食経験のない僕にとっては、しばらくはものめずらしく楽しかった。

「共産党宣言」や「賃労働と資本」を読んだのはこのころだった。なるほど世の中には「搾取」というものがあるのだという程度の理解だったろうか。

はじめて親元から離れた生活と退屈な講義でいささかノスタルジックになり、夏休みに入るや否や帰

省をした。当時はまだ蒸気機関車で、京都から熊本まで10数時間を要した。関門トンネルを過ぎて九州に入るとホッとしたものだが、それからさらに数時間はかかった。顔はススだらけで、筑後市の羽犬塚駅あたりで列車から降りて顔を洗った。

故郷に帰ると、高校の友人たちが待っていて宴会である。この時初めて酒を本格的に飲んだ。前後不覚に酔いつぶれたのは、81年の人生の中でこの時が最初で最後である。

同じ年の夏に、親しかった高校の友人、4、5人で南九州一周の無銭自転車旅行に出かけた。山鹿から阿蘇高森、高千穂、そして延岡、宮崎、鹿児島大隅半島から八代、熊本市へと自転車を走らせた。コースだけを決めてあとは何の計画もなく、行き当たりばったりだったが、お寺に泊めてもらったりして楽しい旅だった。

②

二学期が始まり下宿生活に慣れてきた、適当に授業をさぼる術も覚えて、図書館でもっぱら本を読んだ。

「安保は重い(運動が難しい)」と言われながらも、岸首相の安保改定に向けた動きに対して、59年3月に「安保改定阻止国民会議」が結成された。社共、総評、原水禁、全学連などが参加し、4月に第一次統一行動が開始され、その後23次まで続いた。秋になると徐々にピッチが上がってきて、宇治分校自治会でもクラス討論が始まった。当時は語学でクラス分けがされていたが僕はL-4で、担任教師に15分ほどの時間をもらって全員でディスカッションをしたりしていた。きわめて自由で民主主義的だった。

60年になると、ストライキ参加の決議をあげ、集会やデモへの参加することが増えた。バスで宇治から本学まで行き、たいていは法経第一教室で集会をして、そのあと同志社か立命で府学連集会があり、その後は円山までデモをした。夜は円山野外音楽堂で安保共闘の集会が行われ、労働者や市民であふれかえっていた。僕は入学した5月1日のメーデーで初デモを経験し、10月からの安保のデモに皆勤するようになった。同時に自治会BOXにも出入りするようになり、そこには多くの「先進分子」たちがたむろしていた。彼らと徐々に親しくなり、そして僕は急速に「活動家」になっていった。

③

2回分岐 - 吉田分校、自治会委員長をやった

僕が大学に入学した前年の12月に、それまで共産党に属していた学生を中心に、共産主義者同盟(第一次ブント)が結成されていた。

指導者は、後にブントの書記長になる島成郎や森田実ら全学連OBだった。京都でも京大と同志社の共産党学生細胞の主要部分はブントに移行した。立命の学生細胞は殆ど共産党のままで、安保闘争後にフロント=統社同に移行した。京大では目ぼしい活動家はほとんどがブントに移行していた。その中には僕より3年上の北小路敏、小川登、佐野茂樹たちがいる。活動家になれば自然に彼らと触れる機会が増えてくる。共産党とブントの主張の違いも判らないままに、人間関係の中でシンパになっていくのだった。そのうち学習会に誘われ、レーニンの「何をなすべきか」や「帝国主義論」を先輩のチューターを囲んで読んだ。場所は宇治分校のある黄檗や万福寺の塔頭を借りて行われた。11月に安保共闘の第何次かの統一行動だったのだろうか、東京に行った。日比谷野外音楽堂に大勢の人が集まっていた。集会の前後に全学連の中央委員会が行われ、そこで初めて唐牛健太郎や青木正彦といった指導者の演説を聞いた。ブント以外にも、反主流派の第四インターの論争も聞いた。会議が終わったその夜、ブントの加入書を書いて提出をした。

安保闘争は、そのあと1月の岸の訪米に対する全学連とブントの羽田空港ロビー占拠闘争等を含めて拡大していった。国会では社会党を中心とした論戦があり、国会をとりかこむデモが数次にわたって展開された。

5月19日、岸内閣は衆議院で強行採決を行った。6・19の国会会期末までに、参議院の議決がなくとも自然成立することを見越した暴挙だった。これには市民は怒りを爆発させ、有名な竹内好の「民主主義かファッショか」と一挙に運動は拡大していった。連日のように国会へ向けたデモが展開された。

2015年の安保法制闘争でも同じような光景が見られたが、その規模、頻度、多様さなどは比ではない。かの石原慎太郎でさえ、作家のグループに加わってデモに参加した。

京都でも連日のように集会とデモが行われ、僕が委員長をしていた吉田分校(=2回生)自治会も、集会を開いてストライキ決議を上げ、集会・デモに参加した。多くの学生が自然発生的に東京の国会デモに参加するため夜行の「安保列車」に乗り込んだ。その費用は、大勢の一般市民が答えてくれた街頭カンパで賄われた。

岸は大衆闘争の盛り上がり恐怖して、警察だけでなく自衛隊の出動さえ検討した。しかし当時の防衛庁長官赤城に反対されて断念した。こうした中で全学連の6・15国会突入闘争が行われ、その過程で樺美智子さんが亡くなった。

6・19の自然成立の日まで連日デモが展開され、京都でも、連日の集会、デモが行われた。学生はもはや授業には出ず集会・デモに加わった。だが6月19日、国会前に膨大な大衆が集まる中(主催者発表33万とあるから、全国では100万を超える)、安全保障条約は自然成立した。このある種のむなしさを誰が言い出したのか「壮大なゼロ」と表現された。

安保成立の数日前にはアメリカのハガティー特使が羽田で学生にヘリコプターを取り囲まれる事件があった。安保条約の調印に来ることになっていたアイゼンハワー大統領の訪日は「安全が保障されない」として中止され、岸は6・19のあと退任を表明した。そのあと池田勇人が首相となり、岸的な改憲等の「逆コース」を放棄し、「所得倍増計画」という名の経済主義路線のもと、高度成長が開始された。

さすがに連日の闘争で疲れていた。7月に熊本に帰省するときは体重が10キロも減っていた。安保闘争は戦後最大の闘争と言われる。僕にとってもその後の原点となりその後の様々な運動の時本能的に60年安保闘争と比較する。湧き上がり広がっていく運動の輪と深化していくダイナミズム。この時の躍動感を忘れることはできない。

④

60年安保の成果として保守勢力がこの闘争がトラウマになって改憲を断念し「経済主義」的方向に向かったという説がある。事実岸の孫の安倍まで具体的に改憲を日程に上らせた政権がなかったことから、この総括は間違いではない。しかし僕(我々)にとっては、あれほど盛り上がった闘争が「壮大なゼロ」に終わらずに更に突き進むためにはどのような客観的、主体的条件が必要かということが問題だった。要するに「革命」という観点からみて安保闘争はいかなるものだったかという問いだった。

第一次ブントはこの問題をめぐって安保闘争が終わるや否や内部論争から分裂に至り、年内には事実上瓦解してしまった。大きくは「戦旗派」、「プロ通派」、「革通派」である。そして「戦旗派」の大部分と「プロ通派」の清水丈夫氏(現中核派議長)たちは黒田寛一の「革共同」(革命的共産主義者同盟)に移行した。(数年後に中核派と革マル派に分裂、激しい内ゲバを展開した)

京大、同志社、大阪市大を中心とした関西共産主義者同盟関西地方委員会はこの分裂に対して党内論争はよし、しかし分裂はダメの立場だったが、事態は急展開し、ブントは分裂し中央はなくなり中央のない地方委員会も形容矛盾であることから、自他称「関西ブント」となった。関西でも第一次ブントを関西で立ち上げた今泉、北小路、小川氏たちは革共同に移行した。関西ブントは同志社の佐藤(飛鳥浩二郎)や仲尾(反戦共同代表)さん、大阪市大の柳田、武田信照(元愛知大学学長)さんたちがいた、実戦部隊は、59年、60年入学組の世代だった。同志社の中島(田原芳)、田中正治、福富、大阪市大の藤本(旭凡太郎)、そして京大は僕の同期は「花の34年組」などと言われて、3~40名の同盟員がいた。「職業革命家」(常任)になったメンバーでも、渥美(第二次ブント書記長)、浦野、境(榎原)、清田、新開、また後の「白樺」の高瀬泰司もいたし、熊取6人衆の小林圭二も同期だった。関西ブントの創設期を支えた。

60年安保の後、東京のブントは瓦解し、学生運動も沈滞したのに対して関西のブント組織は残り学生運動も一定の勢力を堅持していた。60年安保でブントを「プチブル急進主義」と批判するのみで闘いもしなかった黒田寛一の革共同にブントの中心部分が移行することは僕にとっては「不潔」であり許

すことができなかつた。今でも黒田の革マルにブントの中心部分が屈服したことが日本新左翼をダメにした出発点だと考えている。事実内ゲバを蔓延させたのは革マルであり、それは黒田の「組織論序説」を読めば、明らかであり、スターリン主義を批判しながらスターリン主義そのものの党派主義である。60年安保当時の唐牛健太郎はおよそこのような党派主義と無縁のキャラの人だったがそれでも一時革共同に行った。のちに親しくなって唐牛さんに「らしくないですね」といったことがある、彼は「俺の一生の不覚だ」と答えた。

⑤

ここで共産主義者同盟を支えた理論、思想について少し触れてみたい。それは日本の新左翼運動の源流だからである。

社会主義が崩壊した現在の若い人には実感がないだろうが、当時はマルクス・エンゲルスは勿論、ロシア革命によって社会主義を実現したレーニンは絶対的権威を持ち、それを継承した（とされた）スターリンもまた絶対的権威を持っていた。国家としてのソ連と更に革命を成し遂げた中国も大きな権威を持っていた。従って20回大会でのフルシチョフによるスターリン批判は驚天動地の出来事だったのである。

また同様に日本でも共産党の権威も大きかった。戦前の、戦争と天皇制に唯一抵抗した政党として特にインテリゲンチヤ、学生では圧倒的権威を誇っていた。戦後の学生運動は一貫して共産党の指導下にあり旧帝大や早稲田をはじめとする有力私学が運動の中心であった。要するにエリートが共産党に集まっていた。各大学の経済学部では近経とマル経に二分されていた。

このように、世界的にも、日本でも共産主義運動は各国の共産党によってのみ担われるという神話が確固として形成されていた。コミンテルンはすでに解散していたが。

だからこのような中で、共産党から離れて「新しい前衛党」を目指したブントの試みは画期的なものだった。しかもただ評論的な集団ではなく正面から安保闘争に全力をぶつけた実践的集団として登場したのは第一次ブントの不滅の功績だと今でも思っている。

それまで国際的にはトロツキーが創設した第四インターがあり日本でもそのいわば「紹介者」として革共同があったが、ブントは戦後の新たな条件の下で実践的な新たな党を目指したのである。世界各国で各国共産党から分離した新左翼潮流が生まれるのは10年後の「68年世界革命」を待たねばならないがブントはその先駆けであったと言えよう。

そのブントの綱領的立場は当然スターリン批判と日本共産党批判を通して形成された。

第一のスターリン批判は「一国社会主義論」の批判である。これはレーニンとトロツキーに依拠し同時にマルクスの原点（原典）にも依拠して展開された。「世界同時革命論」である。スターリンは社会主義は一国でも建設可能であると主張した。（「レーニン主義の基礎」）しかし、MもLも社会主義は少なくとも先進資本主義でのいくつかの革命が必要であるとして「世界同時革命」を主張した。また一国社会主義によってスターリンは1930年代にロシアでは社会主義が実現しこれから第二段階の共産主義に移行するのだと現実を全く無視して主張した。さらに一国社会主義は、世界革命の利益に対してロシア一国の利益を優先してヒットラーとの独ソ不可侵条約や中国での蒋介石との融和など重大な妨害物となった。

当時の日本共産党は一国社会主義を擁護しブントをトロツキストと非難したが、最近の例えば不破氏著書では事実上一国社会主義論を批判している。ソ連、中国共産党との論争を経た結果とはいえ、共産党の当時関与していない若い人ならいざ知らず、不破氏に対しては「あんたに言われたくないよ」と言わねばならない。共産党の自己批判（転身）は常に自らの力で切り開いたものとされ多くの問題で「先人」がいることには一切触れない独善性が特徴である。（原発問題、核実験問題 etc. 60年安保闘争でも共産党では「開かれている」渡辺治氏でも全学連の役割には一切触れない）

第二は二段階革命論の批判すなわち一段階社会主義革命論である。当時共産党内では六全協後方針を決めるべく新綱領策定作業が行われており宮本による草案に対して激しい綱領論争が生じていた。これが有名な「日本帝国主義復活論争」である。宮本たち主流派は日本は独立したとはいえ依然としてアメ

リカに事実上占領され、従属しており、アメリカからの解放＝民族民主革命がまずありその後社会主義革命があるという二段階革命を主張した。これに対して後に「構造改革派」として脱党する反主流派は、すでに日本資本主義は急速に復活しすでに帝国主義として復活している、従って革命は日本帝国主義を打倒する社会主義革命でなければならないとした。

ブントはこの点では後者の立場であったが、それだけではなく、トロツキーの「永続革命論」にも依拠した。ロシア革命で絶対主義打倒の民主主義革命が始まるとしても、その革命の主体は、ブルジョアジー（すでに革命性を喪失して絶対主義と妥協し去勢されているから）ではなくプロレタリアートである、ならばプロレタリアートは民主主義的課題だけでなくさらに進んで社会主義革命へと永続的に突き進むであろう。まして先進資本主義の日本で、革命の主体は労働者階級である以上革命は社会主義革命でしかありえない。戦前の共産党の二段階革命に対しても広範な民主主義的課題（天皇制、地主制）を含むとしても革命の主体が労働者階級である以上一段階社会主義革命でしかありえない。とした。

第三は「平和移行（革命）」に対する「暴力革命」の対置であった。ここでいう、暴力革命とは議会を通じた革命ではなくロシアのような人民の武装蜂起とコンミュン（評議会）による権力奪取を意味する。これまで自前で成功した革命はロシア、中国、ベトナム、キューバ、ユーゴのみであり、資本主義が発達したロシア型の都市での武装蜂起か植民地での中国などの「農村から都市へ」の根拠地と人民軍によるものの二類型しかない。

ブントの基本的立場は以上の三点である。僕は、二点目について大きな補足が必要だと考えるが今でもこの立場を変えていない。

さらにこのような政治的立場と同時に、そのバックボーンとなった思想的、理論的なものもブントには存在していた。レーニンがマルクスを論じてその「三つの源泉」としてドイツの古典哲学、イギリスの古典経済学、フランスの社会主義を挙げているがそれにアナロジーするならば、ブントの三つの源泉は、主体性哲学（唯物論）、宇野経済学、トロツキー的解釈優位のレーニン主義である。これをそれぞれに論じるのには一論文が必要であるので省略するが、それぞれに重要な欠陥があり、のちにいわゆる「12・18ブント」が哲学では加納が、宇野批判では榎原が、レーニン主義ではその前から八木沢（＝新開）が論じたとおりである。

このような思想的立場は政治的（綱領的）立場と密接に関連しておりその違いが時として組織の団結を脅かし分裂に至ることもある。だが、党組織はあくまでも綱領に基づく団結なのであり、例えばレーニンに当てはめるなら、経験批判論（マツハ主義）のボグダーノフ、経済でのブハーリンとの相違があったとしてもやはりボルシェビキなのである。僕は宇野経済学については批判的だが宇野経済学を認めるかどうかで組織があるわけではない、結果としての政治的立場が問題なのである。日本の新左翼の重要な欠陥の一つは、一学生・インテリゲンチヤを基盤としていたため一ある種の悪い意味での理論主義である。（第二次ブントでも、やれ吉本隆明、平田清明一叛旗派、岩田弘の「世界資本主義論」一マル戦派、広松渉一情況派、荒派とはやりの論客を奉じて自分たちの路線の正当性を主張した）

逆に言えば生きた綱領を持ちえなかったということの意味する。

とはいえ、（世界）共産党の神話の中で、スターリン主義を批判してM、Lの原則的立場を復権させ果敢に実践として新たな党、政治潮流形成を目指したことは第一次ブントの不滅の功績であり僕は今でもそれを原点としそれを継承する立場である。

3)

①

60年安保の後、60年代後半の全共闘運動まで少しの間運動の沈滞の期間があった。

60年安保の後の61年の春休みに、当時伊豆新島にミサイル基地を作ろうという動きがあり、この現地闘争に参加した。現地には反対同盟が結成され、寡黙な長老のM氏が長を務めていた。

全自連（共産党が全学連に対抗して作った学生組織）もかなりの動員をしておりその責任者は丸山茂樹だった。（現在、ソウル宣言の日本への紹介、連帯経済の推進者）また多くの文化人も来、どういうわけか劇団関係者が多かった。のちに有名になる別役実氏や菅孝之さんも来ていた。現地では援農をした

り名産の「くさや」の製造の手伝いをしたりもした。M氏には二人の娘がいてやはり反対同盟の中心人物だったが、姉は、反共産党よりで来訪した知識人から新島のジャンヌダルクなどと言われた情熱的な女性だった。妹は共産党よりの地味な人だった。姉は少しして東京の出版社に勤めるようになり、僕が東京に出た時数回あった。やがて彼女は詩人のH氏と結婚することを決めたとき最後に新宿であった。まだ3回生のうぶな、田舎での青年だったのだ。

1962年には大管法闘争があり久しぶりに学生運動は盛り上がった。とくに京大では法案に反対して政権に対峙する全学封鎖を全学1万人投票（学長から学生、職員まで）で決しようという提案を行い学内は騒然となり大いに盛り上がった。僕は同学生会委員長としてこの年に入学してきた後の赤軍派議長塩見たちを（この年度は、塩見、高原など後に赤軍派の中心になるメンバーを含め関西ブントに多くの活動家が加盟した）率いて闘った。久しぶりに僕の停学9カ月をはじめ数名の処分が出された。時計台下の学長室の前で抗議のハンガーストをした。当時の学長は医学部の平澤氏だったが、彼は部屋から出てくると「新開君大丈夫か」と声をかけた。まだ、全共闘の前で平和の時でもあった。

この年本来なら卒業の年だったが、留年して学生運動の指導を続けることになった。（ブント学対部で）友人たちは多くは就職をし、大学院へ行き、数名は大阪や尼崎で地域に入り労働運動等の活動を始めた。

安保闘争後の学生運動の在り方、また大きくは「壮大なゼロ」に終わった運動はそうならず更に進むためにはどのような客観的・主体的条件が必要なのかを考えた。

「第三期学生運動論」というものを提起した。その内容は要するに1950年前後の第一次全学連（武井照夫氏）、第二期の60年安保の（唐牛健太郎）全学連、そしてこれから第三期が始まるのだと論じた。これは極めて明確な時代区分であり説得力のあるものであったし、何よりも60年安保後次の展望を見いだせないでいた学生運動に次の時代が始まるのだと告げるものであったからかなりの影響力があった。

当然、では第一期や第二期の運動とどう違うのかという内容が問われる。それに答えたのが「ドイツ革命の敗北とローザ」（八木沢二郎）である。僕が書いた多くの論文のなかで、最もまとまった自分と言うものなのだが一番いい論文である。まだ23歳の時であるが、これを書いたときマルクス主義というものが、外的な字面ではなく自分のものとして分かったと感じた。

そこで論じたのは、次のようなことである。

60年安保の思想的ヘゲモニーは丸山正男や竹内好たちの市民的民主主義者にあった、また運動が大きく高揚し政権打倒を目指したが、決して資本主義そのものの打倒を目指したものではなかった。我々はその意味で「市民的政治闘争」と名付けた。全学連（ブント）はその運動の最左派として、その運動を急進化させ「徹底した民主主義」を（客観的には）を目指したのだ。だが民主主義の徹底化は革命の一条件ではあるが、資本主義の土台に（社会的経済的変革）に手を付けない限り限界に達する。「徹底した民主主義」から土台（体制そのもの）の変革に転嫁するためには第一に客観的条件が必要である。その条件とはレーニンが「左翼小児病」で書いているとおりである。（大衆がこれまで通り生活できず、変更を要求するだけではなく、支配者階級がこれまで通りに支配できない—「下層が古いものを望まず、「上層」が今まで通りにはやっていけなくなる時にはじめて革命は勝利できる」「20年を一日に凝縮したような日々・・・」）

そのような意味で60年安保は高度成長の時代であり、革命の客観的条件はなかった。

僕は今でもこのレーニンの革命の条件は正しいと考えている。それを「危機論」、「危機待望論」と揶揄する人もいるが、一定の危機なしに革命はあり得ない。資本主義が修正能力ができて小さな「危機」はあっても大きな体制を揺るがすような危機はあり得ないと考えるなら—それはバルンシュタイン以来の修正主義の本質だが—革命ではなく改良の積み重ね＝構造改革でいいのだ。また危機があるということは待望論ではない。「平時」での様々な「改良闘争」の蓄積なしには危機が来たとしてもそれに対応できずチャンスをつかむことはできない。

一方、主体的条件とは何か？

さきに述べたようにこれまでに成功した革命は先進国での都市蜂起型か植民地での根拠地・人民戦争

型かのいずれかである。ここでは前者について述べる。

革命はフランス大革命→1848年2月革命→1871年パリコンミュン→1917年ロシア革命と発展展開してきた。フランス大革命では資本主義の発展段階に応じてまだプロレタリアートは登場せず市民革命である。だがすでに階級分化は生まれていて思想的にはルソーに表現される急進主義が存在していた。(ルソーの「人間不平等起源論」はすでに私有財産を不平等の根拠としている)、1848年6月事件ではじめて労働者階級は市民と自己を区別した形で登場した。これは資本主義の産業資本主義段階の始まりに照応している。そしてパリコンミュンで労働者の自己権力としてのコンミュン、マルクスのプロレタリア独裁の原型を作るまでになった。これは1800年代後半からの資本主義の独占資本主義段階(帝国主義段階)への移行の入り口に照応する。そして帝国主義段階に至り(「革命の現実性」ルカーチ)、ロシア革命によって現実の社会主義革命がはじめて成功した。

また戦術的にもパリコンミュンまでは街頭バリケード戦でありロシア革命に至って工場を基軸としたソビエト=工場評議会ができ「蜂起の陣形」が形成された。ポロレタリアート「ドイツ革命の敗北とローザ」では以上のような革命運動のサイクルを論じ「市民的政治運動」を超えるものとして労働者階級の独自性とその表現としての評議会=労働者自己権力を措定した。

さらに二つのことを言っておかねばならない。

第一はこの論文で、のちに「グラムシ的問題」と名付けたことを1919年のドイツ革命の敗北に則して論じた。つまりロシア革命に「現代革命」の普遍的要素がはらまれているとしても、同時にロシア的特殊性があるのも事実である。ロシアでは絶対主義権力がありその基礎に半封建的大土地所有制が残存し、ブルジョアジーはすでに絶対主義権力に屈服し去勢されている。したがって本来ブルジョアジーがなすべき民主主義的課題(絶対主義権力の打倒と大土地所有制解体)をプロレタリアートが行わねばならず、だがプロレタリアートはそれにとどまらず連続的に社会主義革命へと突き進む。いわゆる「永続革命型」の革命であった。以降の中国革命をはじめとするものも、プロレタリアートのヘゲモニーによる民主主義的課題(民族解放と封建的地主制の解体)からはじまる革命である。そしてこのような民主主義的課題がすでに解決している先進資本主義国では1919年のドイツ革命の敗北(ローザ・ルクセンブルグの虐殺)をはじめとして成功事例はない。このことはすでにレーニン、トロツキーによって「ロシアのような遅れた国では比較的権力をとるのはたやすいが、権力奪取後の社会主義の建設は困難である。逆に進んだ国での革命は難しいが、社会主義の建設は比較的たやすい」という「東方—西方」の問題としてとらえられていた。そしてこの問題を意識的に提起し、「東方では国家がすべてであるが、西方では市民社会という強靱な砦がある」それに照応して「東方での機動戦、西方での陣地戦」という有名なテーゼを提起したのがグラムシ(「獄中ノート」)である。

僕は結論としてイギリス労働運動での「ショップスチュアート」運動にヒントをえて生産点での運動としての評議会運動の重要性を主張した。

今でもこの「グラムシ」的問題(東方—西方)を一貫して考えている。

アントニオ・ネグリが「帝国」で論じたように、経済のサービス化や工場のIT、ロボット化にともなって労働者階級の変容があり、そのもとでの労働者「自己権力」とは何か—僕はそれが議会ではなく「評議会」だと考えるが資本主義—労働者階級の変容に応じていかなる評議会なのか?—また現代の「陣地戦」とはいかにあるべきか?

第二は、マルクス主義での「永続革命論」に関する「急進主義の克服」という問題をこの論文で提起した。実はこの論文で、僕が最も言いたかったことはこの点にあった。第一次ブントからその後の第二次ブント—その鬼子としての赤軍派にいたるまで戦術のエスカレートによる局面の打開=戦術主義(戦術の重要性については関西ブントの60年安保総括としての「政治過程論」で従来の戦略—戦術という考えを批判しその両者の関連性を強調して大戦術—小戦術という考えを提起している)そこにある「急進主義」。

マルクスは1848年2月革命に際して「その鵠の声は永続革命である」と述べた。だがやがてその考えを放棄し第一インターから第二インターに表現される組織戦へと移行する。その様はエンゲルスの「フランスにおける階級闘争」の1895年の有名な序文に書かれている。

永続革命論はこの組織戦を媒介することで「否定の否定」として、すなわち急進主義を克服した形で復活する。一というのが論旨であり、ドイツ革命でのローザ（スパルタクスブント）の敗北は急進主義を克服できない思想による。つまり60年安保のブントをローザの思想と共通するものとして批判し克服しようとしたのがこの論文の肝であった。だが、塩見をはじめとする「弟子」たちは、この論文から評議会や、大衆（マッセン）ストライキといった戦術面だけを「継承」した。

②

この「第三期論」に基づいて60年安保後分裂していた学生運動の統一（共産党を除く）に京都府学連をバックとして取り掛かった。そのためには東京や全国の旧ブント系の結集がまず必要であり僕は北海道（北大）から九州（大分大）までオルグに行脚した。また東京では中央大の味岡（三上修）と特に親しかった。東京に出ると中大の自治会BOXに行き、夜は新宿のしょんべん横丁で安酒を飲み東中野の味岡の下宿に泊まった。ブント系だけでなく中核派、社青同、構造改革など他党派のメンバーとも交流ができた。仲が良かっただけではなく喧嘩もしたが、今となっては「戦友」であり、何かの会合や集会で顔を合わせれば懐かしむ。

だがこの試みは成功しなかった。70年安保—全共闘運動までの運動の停滞があり共通の運動目標を掲げて全国政治闘争を展開する盛り上がりが出ていたのだ。結局、ベトナム反戦闘争の中での三派全学連の結成（1966）まで待たねばならなかった。

この試みの後、長かった学生運動指導の役目を終えて大阪の関西ブント事務所に移った。

この学生運動指導の中で京大—関西の多くの後輩と苦楽を共にした。代表格は赤軍派を結成した塩見孝也だろう。彼は著書のどこかで「若い時の師匠」として僕の名を挙げている。よど号ハイジャックで北朝鮮に行った田宮（大阪市大）も後輩のひとりでありハイジャックの一報があったときこの指導者は田宮だと直感した。そのような度量のある人物だった。この世代は赤軍派世代とも言われるが、僕はブント内では路線的には彼らと最も遠かったが人脈的には最も近かった。このようなブントや活動家だけではなくシンパを含めると膨大な人に接したことになる。のちにタカラブネの社長になって、銀行に挨拶に行ったとき、いくつかの京都支店長に「私は新開さんのことよく覚えていますよ」と言われたりした。

③

学生運動をして就職したメンバーや安保闘争の中でブントに接近してきた労働者、それと前田祐悟氏（大阪中電共産党細胞からブント、同時に同志社、立命大学院に通っていた）のいた大阪中電とそこで結成されていた「電通（現 NTT）社研」の存在は大きかった。のちに電通労組大阪青年部を握り「中電マッセンスト」を行う拠点となった。これらの労働者「細胞」の事務局的なことが新しい仕事だった。自分では三洋電機に残る左派グループ「電機社研」のORGを担当した僕が労働運動なるものにじかに接した初めての経験だった。このような活動がやがて67、68年にベトナム反戦闘争が拡大し激化すると「反戦青年委員会」へとつながり、各地区反戦青年委員会の結成を通してブントの労働運動への一定の影響力拡大に寄与した。

生活は苦しかった。同盟員からの党費は事務所費用などの活動費になり「常任」を養うことはできず、個人カンパや家庭教師、時にはアルバイトで住友金属の現場での力仕事をやった。その時大独占企業の何重にもある下請構造と労務管理体系を垣間見た。

一方このころになるとブント統一へ向けての動きが加速していった。革共同は中核派と革マル派に分裂し、これに対抗するためにも各地にあったブント系の結集が必要だった。まず、黒岩（新潟での地域医療で有名、新潟衆議院議員黒岩の父）たちと合同し、次に当時「世界資本主義論」で有名になった岩田弘を奉じる服部たちのマル戦派と合同し第二次ブントが結成された。ほぼ時を同じくしてブント（赤）中核派（白）社青同解放派による三派全学連が結成された。

こうして世界的なベトナム反戦闘争、学生の反乱と軌を一にする舞台が整ってきた。

以上「前編」終わり

1) 「世界同時革命」としての1968年

ウオーラストイン(世界システム論)は1848年2月革命と1968年を世界同時革命の年としている。彼の世界システム論からすればこの年がシステムチェンジの象徴的年だったからだろう。

- ① 1848年は産業革命を経て資本主義が確立した時期
- ② ドイツをはじめとして「国民国家」が形成される時期
- ③ 二月革命(6月事件)でプロレタリアが市民から区別して登場した時期。

1968年の同時革命の意味は?

- ① ベトナム民族解放闘争によって帝国主義—植民地というシステムが崩壊する時期
- ② 産業資本(工場、物)からサービス・金融資本(非物質)への転換の時期—すぐ71年のニクソンショックで金本位制が最終的に終わった。グローバリズムと新自由主義資本主義への移行
- ③ 古典的民族解放闘争の終焉と先進国での工場労働者主体の運動の終焉、「あたらしい古い社会運動」

2) ベトナム反戦を共通として、世界的学生の反乱—スチューデントパワー、フランスの5月革命、日本の全共闘運動、広い意味では中国紅衛兵文化大革命も、

- ①世界的な高度成長の時期だった、
- ②日本の全共闘運動が東大医学部闘争(教授の家父長的医局制度)と日大古田体制への闘争、フランスではナンテールバリ第10大学の旧態依然たる学生への締め付けへの闘争から始まったことに表れているように、古い管理体制への闘争として始まった。

基底に同時に大学はかつてのエリートをそだてるものから高度成長に見合った「労働力商品」を生み出す場へと変化しつつあった。この変わり目の閉塞感、

- ③従ってこの闘争は、大学の社会的存在意義を問い資本に奉仕するする大学を「解体」することをスローガンとした。資本側も古い体質を打破してよりスマートな「ポストモダン」な管理体制へ転換するきっかけとした。
- ④ 運動の「暴力性」日本赤軍派、ドイツ赤軍、イタリア赤い旅団、アメリカブラックパンサーETC
- ⑤カウンタカルチャの誕生

3) 反戦青年委員会

各地に地区反戦ができ青年労働者の結集の場となった、もとは社会党—総評が作った物だが新左翼諸派がこれを利用して運動を作っていた。

4) ブント内党内論争と赤軍派の誕生

5) 僕自身はすでに大学とは関係なかったが京大の運動を時々覗きに行った。

もっぱら反戦青年委員会の活動をしていた。

6) 全共闘・70年安保と60年安保闘争の比較—70年が生み出したもの

60年安保が、戦争体験を背景とする平和や民主主義を問題にした(それを戦前に“逆コースする岸への怒り)にしたのに対して68・70年闘争はその下にある「構造」を問題にした。ベトナム反戦闘争は帝国主義—植民地=抑圧民族—被抑圧民族という「構造」(ファノンの告発「地に呪われたる者」や「華青闘告発」)、大学の自治一般ではなくそこにある資本の労働力商品を生み出す「構造」、家父長制的な教授会の「構造」ETC。構造=体制を問題にしたという意味で60年安保を超えたものだった。だが構造を変える=革命の客観条件はなかった(なにせ高度成長の頂点の時期だった)。ない中で構造=体制の変革をもとめるという矛盾は勢い運動の性格をアナーキーなものにし暴力性を帯びたものにした。この「構造」を問題にしたテーマはそれと前後して、原発、フェミニズム、公害、等の「新しい社会運動」に展開されていく。同時にそれらが「シングルイッシュ」と呼ばれたように「構造」全体を問題にする「大きな物語」=政治の総体性の時代のいったんお終焉を意味した。

7) 運動の暴力性と軍事組織

日本の赤軍派に限らず68・70年闘争はその暴力性や軍事を一つの特徴としている。赤軍派のように革命論

一権力奪取まで理論化したかどうかは別にして。多くの新左翼は軍事組織を何らかの形で持ち、火炎瓶は勿論、農業から比較的簡単にできる鉄パイプ爆弾や一部では銃火器も保持していた。そしていくつかの「軍事闘争」や爆弾事件を引き起こした。

今から考えれば赤軍流の革命の条件など当時はなかったことは明白なことであり、路線としての間違いは明らかであるし彼ら自身が「自己批判」している。僕自身はこのような「軍事闘争」に対して当時も否定的だったが（軍事反対派などと揶揄された）それが対権力に向けられている限り「そういう時代だったのだ」としか言いようがない。このような軍事組織を少しでも経験した人はロシアのテロリスト組織を思い出すだろう。事柄の性格上あまり赤裸々には書けない。

8) このこととも関連して内ゲバと連合赤軍問題に触れておかねばならない。対権力の暴力は賛否はあれ路線問題として「総括」可能であるが、内部に向けられた暴力はどうしよもない、すべてではないにしろ新左翼運動から学生を遠のけ退潮させたのはこの二つであった。内ゲバは中核派一革マルと社青同解放派の分派闘争の二つが特に激しく殺し合いもあった。ブントは比較的少なかったが対マル戦や仏氏リンチなど無縁ではなかった。革マルの黒田の組織論をはじめスターリン主義（粛清の論理）を克服できていなかった。

他方連合赤軍の「同志殺し」は内ゲバとは別の要素をはらんでいる。僕はやったほうの森も（大阪市大）、やられた山田（京大）たちもよく知っているだけに、明るみになった時いたたまれない気持ちだった。

第一の問題は「人民の海」に支えられない軍事一人歩きの路線問題である。第二はその中で狭い仲間の共同体を「共産主義の母体」とする考えそれは「純化」を求めて少しの「作法の違い」さえ許さないものになって行った。第三はあえて言うなら指導者の「器」である。軍事闘争では人はある種の極限状況に陥る。その時の隊長の人を落ち着かせる度量は決定的なこともある。（ゲバラを想起せよ）僕もそれほどの状況ではなかったが似た状況の体験はある。後に赤軍派の指導的メンバーに「君たちが指導者であったならああはならなかったでは」と問うたことがあった。「一人ではどうか、数人いれば」ということだったように思う。

9) ブント「全国委員会」の結成—71年

RG 派などの軍事路線との対立、仲間だった榎原や浅田やとの決別。大衆闘争への回帰。

「八木沢メモ」一要するにレーニンを引用して「民主主義闘争」の意義を強調した、左翼小児病批判のメモ

X) (株) タカラブネ時代（1976～2005年）

- ① 組織の分裂によって「指導者」としての活動を続けることに疲れ果てた。「刀折れ、矢つきた」感。
- ② 二年先輩のN氏を頼って1976年（株）タカラブネ（1979年上場）に入社
- ③ 仕事は、プライドもあったから普通にやった。仕事の論理があるからそれに則してやればそれなりに面白かった。左翼の「情勢分析」はビジネスの世界では「マーケティング」、また「組織論」も役に立った。
- ④ 会社に労働組合が結成された。当時の社長（N氏の兄の創業者）から「任せるので納めてくれ」と頼まれ、工場長に就任。労働組合との団体交渉も激しくやり取りした。その後N氏の次兄（創業者の死後社長）による第二組合づくりがありこれに対抗して「管理職組合」を結成して反抗、一時解雇された。しかし会社には社長は入れず僕は解雇されたが会社に行き全体を仕切っていた。
当時の組合の委員長が北条氏（寺田氏の龍谷大時代からの親友）、書記長が中岡氏（現全労協事務局長）である
- ⑤ その後曲折はあったが1992年に社長になった。その後10年社長2002年「民事再生法」、2005年まで会社の整理。
- ⑥ 僕のような経歴の者が「社長業」＝ブルジョアを務め、そこに矛盾を感じなかったか？経営の論理＝資本の論理はある。その論理の中で最大限「良心的＝労働者の論理を理解すること」
- ⑦ 垣間見た財界 京都という範囲ではあるが彼らがどのような活動なりどういうものの考え方をするかなど
- ⑧ この間、人間関係としてはもとの仲間たちとの交流はそれなりにあった。例えば先に書いた唐牛さんや、

青木昌彦（スタンフォード教授、ノーベル経済学賞を日本人が取るとしたらこの人と言われていた。＝第一次ブントの最大の理論家姫岡玲治）。塩見をはじめ後輩たちも訪ねてきた、政治談議はすこし昔話をする程度でお酒で歓待したり時には瀬戸内寂聴行きつけの祇園のお茶屋「みの家」（小説「京まんだら」の舞台）に連れて行ったりした。瀬戸内さんとは「みの家」の女将を通してそれなりに親しくしてもらった。彼女は「美は乱調にあり」で大杉や伊藤野枝を書いているように、また「人生は恋と革命」が口癖だったように、また「最後の男」が左翼作家の井上光晴であったように「革命家」を尊敬しており、僕の過去を知っていて付き合ってくれた。会社が倒産した時わざわざ電話で「頑張りなさいよ、会社なんて人生の一部だから」と励ましてくれ、のち岩手の彼女のお寺に招待してくれた。また反戦共同の円山集会にも僕の顔を立ててゲストで来てくれた。

Y) 反戦共同2006年～

①第一次安倍内閣（2006年）は「美しい国日本」等復古調で改憲を掲げて登場した。我々世代には、その祖父岸に通ずるにおいを感じた。安保世代の小川登（元桃山大学教授）や東京の塩川喜信（元全学連委員長）氏などが中心となって「9条改憲阻止の会」を立ち上げた。京都ではこれにも呼応して「反戦・反貧困・反差別共同行動」を立ち上げる話が進んだ。田川晴信が「円山野音の会場をおさえたから」と「既成事実を」作ってみんなに10・21集会（10・21は国際反戦デー）を呼び掛けた。田川は同志社のブントで若い時からの親友で、彼から僕にも参加要請があった。

率直に言えばためらいがあった。もう30年も前に「その道を捨てた」身である。

しかし、田川の口説きと安倍の危険なにおいで最初は「おずおず」と打ち合わせ会議に参加した。工藤美弥子の店の二階だったろうか。その時現役の活動家たちとも顔を合わせた。寺田はタカラブネの子会社にいたから知ってはいたが活動家として知っていたわけでも個人的交流があったわけでもなかった。親しくなったのはこの回を通してである。仲尾さんとも数十年ぶりにあった。

② 何回かの打ち合わせ会議を経て2007年10・21に第一回の集会があった。1200人の集会となり大成功だった。そのころになるとだいたい昔の「感」も戻ってき、また情勢分析や30年の空白を埋めるための勉強もした。また京都では寺田が、大阪では前田さんが道案内をしてくれて要所の人物に引き合わせてくれた。こういう時は「昔の名前」が役に立った

③ やがて「新開が運動に戻ってきたらしい」ということを聞きつけて例えば東京の「情況社」の古賀や大下が訪ねてきて手伝ってくれと頼まれたりした。また東京のブント系諸組織の連絡会をつくるコーディネータ役などもやらされた。30年間のブランクで「さら」であることや、やはり昔の名前のせいである。また関西では岩田吾郎を事務局にして旧ブント系の幾人かが集まって「KCM」（関西共産主義運動）という勉強会が発足した。現在のルネ研の前身である。こうして急速に活動家に戻った

④ 反戦共同の活動の中で特筆すべきは2011年3・11以降の原発の闘いである。

僕自身原発事故にショックを受けた。同期の小林（彼も反戦共同に世話人として参加していた）からも原発の危険性は聞かされ彼の「講義」も聞いたこともあったがリアリティはなかった。もっぱら「潜在的核能力」という政治的観点から反対で「それとしての」危険性にはまったく鈍感だった。反戦共同に小林がいたことは大きなアドバンテージだった。確か4月には小林の講演を企画し「きずな」の3～40人がせいぜいの会場にどこから聞きつけたのだろうか100人ほどの人がやってきた。この年の10月集会にはドイツから緑の党を招待しよう決め数100万金が必要だったが、故杉山を中心に準備に入った。副党首のベーベル・ヘーンが来てくれた。彼女を小林と一緒に若狭に案内した。その時初めて中嶋哲演氏に会いその存在を知った。（ほど、その方面無知だった。企画が時機に合えば大きく構えれば金はどうにかなるものだと実感した。そのあと民主党政権下で大飯原発の再稼働が動き始めた、現地闘争、現地への工作を行った。数名のメンバーでおおい現地にチラシのポステイングをやり

ごく少数の原発反対派のつてを求めて集まってもらったりした。東京の柳田さんの「たんぼぼ社」を知り

交流ができたのもここ頃である。東京ではさきの「9条阻止の会」の連中は「経産省テント村」を立ち上げ、その村長淵上氏たちとも連絡を取り合った。

また、おおいへの帰りには哲演さんの「明通寺」にしばしば立ち寄って意見交換した。このような準備の下で再稼働時のおおい現地の「オキュパイ」闘争があった。故吉岡たちがテントをはりはじめ最終的には全国津々浦々から若者たちがテントを持って駆けつけてきた、その数数十個。現地集会も何回かやったがどこから来るのかいつも予想を超える人数、予想を超えた全国からの参加があった。またしばしば「福島の女たち」も来てくれたが、現地の人も彼女たちが話すと賛成派を含め聞いていた。

僕にとって「やってるかん」ではなく「やった」感のある一連の闘争だったし、反戦共同のはたした役割は（全国的にも）大きかった。たんぼぼの柳田氏が「たいしたマネイジメント力」と称賛してくれた。

同時に現地若狭に行くにつけて原発反対は前提としてそれを受け入れている現地の苦渋や中央―現地の原子力村の構造を感じざるを得なかった。そこから都市―農村関係や限界集落などに関心を抱くようになっていた。現在の「ミュニシパリズム」への関心もここに発する。

⑤ 2015年安保法制

Z) 終わりに

- ① こうして振り返ると自分の変化のなさ（進歩のなさ、良く言えばブレのなさ）に気づく
- ② 60年安保の経験を原点としてあの「壮大なゼロ」をどう超えるかをずーと追い求めて、依然として「永続革命」を超える先進国革命―「グラムシ」的問題を考えている。
- ③ただ、資本主義の変容や「社会主義」の崩壊といった事態をどのように考えるかを考えつつ
- ④ さらに社長として経験した経営の論理も例えば自治体の在り方を考えたり原発立地の「原発のないまちづくり」といったことを考えるとき、ひいては「社会主義」（非資本主義社会）にも「建設」が必要である以上は役に立つだろう
- ⑤ また反戦共同の運動の中で、原発や、安保法制や各種の選挙運動（なにせ昔もサラリーマン時代も投票に行ったことはなかった。唯一行ったのはウトロで著名な田川夫人が宇治市議会議員選に出たときのみ）といった市民運動と接するようになって視界はずいぶんと広がった。昔は党派運動としての政治闘争しかなかったのだ。
- ⑥ このような運動がどのような社会を目指しているのか―社会主義・共産主義―として社会主義の崩壊や中国の現状を見るときいかなるものか、また政治勢力が必要として「党」とはいかにあるべきなのか。等々解けない問題はたくさんある。
- ⑦ 反戦共同を主舞台として「ルネ研」や「ミュニシパリズム京都」はたまた「ユナイト京都」―「南部市民連合」、「つなぐきょうと」等社会変革に必要と思われるおおいの舞台装置に参加している
- ⑧ 「永続革命」的に「徹底した民主主義」を追求することから、何かが見えてくるだろう。昔から「新開は大衆運動主義者だ」と賛否を含め言われてきた。

あとは若い人に希望を託すしかない。日本はいまや「没落帝国主義」である。それに応じた政治の腐敗と低級化、経済の没落、社会の疲弊この中から何が出てくるのか、行くところまでいかにないと変革の芽は出てこないのか？